

## 高等教育機関における手話通訳研修プログラムの検討

中島亜紀子<sup>1)</sup>, 蓮池通子<sup>2)</sup>, 白澤麻弓<sup>1)</sup>, 磯田恭子<sup>1)</sup>, 萩原彩子<sup>1)</sup>, 石野麻衣子<sup>1)</sup>

筑波技術大学 障害者高等教育研究支援センター<sup>1)</sup> 茨城県手話通訳者協会<sup>2)</sup>

**要旨:** 全国の高等教育機関において、障害学生への支援を充実させ学習環境を整えようという取り組みが普及してきており、聴覚障害学生への支援についても様々な情報保障手段や支援者の養成方法が浸透しつつある。その一方で、手話通訳による情報保障支援については、高等教育機関特有の通訳ニーズがあり学術的な内容に対応するための養成方法の確立が必要であるものの、いまだ具体的な体制の整備が立ち遅れている状況にある。本稿では、5年間にわたり、高等教育機関において手話通訳を行うために必要とされる研修テーマの洗い出し及び研修プログラムの作成に取り組んだ経過と成果を報告し、今後高等教育機関において手話通訳による情報保障支援がさらに普及し、かつ支援の質的向上を図っていくための要素を提示する。

**キーワード:** 聴覚障害学生, 高等教育, 手話通訳

### 1. はじめに

高等教育機関における聴覚障害学生への情報保障支援においては、ノートテイクやパソコンノートテイク等の文字による支援に比べ、手話通訳の導入体制の整備が遅れている状況にある。日本学生支援機構(2013)によれば、聴覚障害学生に対し手話通訳による情報保障支援を実施している高等教育機関は、支援を必要とする聴覚障害学生が在籍する大学等の20.8%となっており、数年の間にも微増ではあるが徐々に普及している状況がうかがえる。しかし、大学教育プログラムの多様化や、聴覚障害者が進学する学部・専攻の多様化、大学院進学者の増加等に伴い、実習、実験、グループ討議、研究発表会等での情報保障の必要性は更に増加している。双方向のやり取りがあり即時的あるいは臨機応変な情報保障が求められるこれらの環境では、実際は文字による情報保障が行われていても本来は手話通訳のほうが適している場合も少なくないと考えられ、20.8%という実施数に現れていない潜在的な手話通訳ニーズが、存在するものと思われる。

そうした手話通訳の担い手については、多くの高等教育機関が市区町村や都道府県に登録している手話通訳者に頼っている現状がある。これら通訳者が日頃担っているのは、主に成人ろう者を対象とした地域生活に関わる通訳であり、高等教育における手話通訳とはその特性も対象者も大きく異なっていると言える。しかしながら、求められる専門性の違いが深く認識されないまま大学の授業に派遣される例も少なくなく、派遣された通訳者は個人の努力によって、大学での通訳ノウハウ獲得の道を自ら模索してきた。今後、聴覚障害学生がどの大学、どの専攻に在籍しても質の高い手話通訳支援を享受できる環境を作っていく

ためには、高等教育機関において求められる手話通訳技術を系統的に研修するための研修プログラムが必要とされている。

そこで、本学が平成19年から23年にかけて取り組んだ「高等教育機関のアクセシビリティ向上を目指した筑波聴覚障害学生高等教育テクニカルアシスタントセンター構築事業(TTAC事業)」では、高等教育機関における手話通訳者の研修プログラムの検討に取り組んだ。

本稿では、この取り組みにおけるプログラムの検討過程と成果を報告する。

### 2. 試行的な研修の実施

本事業では手話通訳者によるチームを構成し、平成19年から21年までは実験的に大学での手話通訳支援の実践を行いながら、それら実践がより円滑に担えるようになると思われる研修テーマを設定して、年間数回実施した。

#### 2.1 通訳者チームの構成

通訳者チームの構成員は、手話通訳士の資格を有し、手話通訳者養成校で学んだ人、地域の養成講座で学んだ人、大学の手話サークル等で手話を身に付けた人など様々な養成の機会を経ており、かつ、主に地域で通訳活動をしている人から大学や学会等での通訳経験が豊富な人まで様々な背景を持つ通訳者で構成した。実際に全国各地の高等教育機関で通訳を担っている人材のバックグラウンドもこのように多岐にわたるため、チームの構成員から研修会の内容に対して幅広いフィードバックを得られるよう工夫した。

#### 2.2 試行的な研修の例

この期間に実施した研修テーマとしては、手話通訳実践

に直結するような「聞き取り通訳」「日本手話」の実技のほか、「通訳者の役割」「通訳の事前学習方法」等について音声同時通訳の知見を参考に学ぶものや、「高等教育での支援の現状」「アメリカにおける高等教育での手話通訳最新情報」など高等教育支援特有の課題を扱うものなども取り上げた。以下に、主要な研修テーマとその概要について紹介する。

### 2.2.1 「高等教育での支援の現状と通訳者に求められるもの」

高等教育機関で学ぶ聴覚障害学生が置かれている状況を知るとともに、求められている通訳者像についての講義を行った。主に地域で活動をしている通訳者はもちろん、大学での通訳経験があっても自分が対面してきた聴覚障害学生以外の状況を知らない通訳者がほとんどであったが、高等教育での通訳や学生への通訳が、他の通訳活動と比べてどういった特性を持っているのかという点について、本取り組み以外の場で学んだ経験のある通訳者はほとんどいなかった。

### 2.2.2 「通訳の事前準備について」

日本語－中国語の音声同時通訳の専門家を招き、音声通訳において通訳の事前学習をどのように行っているのかについて研修を行った。主催者から提供された資料以外に、自分で入手できる関連資料や情報があることやその検索方法等について学んだ。手話通訳の場合、生活場面の通訳では特に事前資料を活用する例が少なく、音声通訳から得られる知見が多いものとみて研修に取り入れた。

### 2.2.3 「日本手話集中講座」

ろう者の日本手話講師を招き、短い題材を手話で表現する課題を通し、日本手話文法を活用して事象や論理を忠実に表現する方法について研修を行った。

## 3. 研修ニーズ調査と求められる研修プログラムの検討

3年間にわたり実験的な手話通訳支援と並行して行ってきた研修会の効果と、手話通訳者が持つ研修へのニーズを改めて整理するため、平成22年度に、通訳者チームを対象にアンケート調査を行った。調査では、それまで実施した23の研修会についての評価を尋ねたほか、35の研修テーマについて、高等教育機関で手話通訳を行うに当たり自身にとっての必要性と重要度を尋ね、それぞれ1～5の5段階評価で回答を求めた。35の項目設定にあたっては、これまで実施した研修会のテーマのほか、通訳者から実施要望の出ていた研修内容や今後必要と思われるテーマ等を加えて構成した。通訳者チーム構成員のうち、8名から回答を得られた。回答数は少ないが、研修プログラムの検討に中核的に関わった通訳者からの意見であるため、参考情報として以下に結果を記載する。

### 3.1 研修会に対する評価

3年間で実施した全23回の研修会については、ほとんどの研修について5段階で3以上の評価が得られ、現場を担う通訳者のニーズに概ね沿うテーマ設定であったことが確認できた。中でも、特に評価の高かった研修は表1の通りであった。

このほか、自由記述では、高等教育機関で学んだ経験のあるろう者を講師に招いて行った「高等教育支援の現状と通訳に求められるもの」について、他で学ぶ機会のない内容で最も印象的だったとの意見や、音声同時通訳者を講師に招いて行った「通訳の事前準備について」が非常に参考になり、手話通訳への応用の仕方を更に突き詰めてはどうか、との意見が寄せられた。

表1 評価の高かった研修テーマ及び内容

研修テーマ	内容
【実技】日本手話から日本語への翻訳	日本手話を見て日本語に翻訳する実技を通し、日本手話文法のしくみを学ぶ
【実技】大学講義の手話通訳	大学講義を題材に聞き取り通訳を行い、ろう者講師の助言を得ながら論理的な表現を学ぶ
【実技】日本語から日本手話への翻訳	日本語の題材を日本手話に翻訳する実技を通し、日本手話文法に基づく表現方法を学ぶ
【講義】日本語トレーニング	大学講義を題材に、接続詞等をポイントとして論理の把握や話題展開の予測方法を学ぶ
【実技】日本手話の集中講座	CL表現、ロールシフト等のテーマに分かれ、ろう者講師から日本手話表現を丁寧に学ぶ
【講義】手話言語学	手話言語学の基本的知識として、音韻論、形態論、語用論の基本を学ぶ

### 3.2 各研修の必要性及び重要性

35の研修テーマについて、「自身にとっての必要性」及び「高等教育で手話通訳を担う通訳者にとっての重要度」については、表2の通りの結果が得られた（数字は評価平均）。

通訳者自身が自分にとって必要と感じている研修テーマについては、上記の「研修会への評価」に比べ回答にバラつきが見られた。これまで受けてきた養成や研修などが個々により様々であることを反映したためと思われる。

その中でも共通して「非常に必要」「必要」と回答されたのは、「CL表現」「ロールシフト」等の日本手話に関する

表2 各研修テーマの必要性および重要度の評価平均

研修テーマ及び研修内容	必要性	重要度
<b>I 手話に関すること (講義)</b>		
1. 手話言語学	4.8	4.6
-1 手話の音韻論 (手型など)	4.5	4.4
-2 手話の形態論 (CL など)	4.5	4.4
-3 手話の統語論 (非手指動作, 語順など)	4.5	4.4
<b>II 手話に関すること (実技)</b>		
1. CL 表現	4.9	4.7
2. ロールシフト	4.8	4.7
3. 日本語から手話への翻訳	4.9	4.7
<b>III 手話通訳に関すること (講義)</b>		
1. 日本での手話通訳養成	3.9	3.5
2. アメリカでの手話通訳養成について	3.8	3.3
3. アメリカの手話通訳制度について	3.6	3.2
4. アメリカ高等教育での手話通訳支援について	3.6	3.8
<b>IV 手話通訳に関すること (実技)</b>		
1. 聞き取り通訳	4.7	4.5
2. 大学講義の聞き取り通訳	4.8	5
3. 読み取り通訳	4.8	4.7
4. ゼミや研究発表の読み取り通訳	4.9	5
<b>V 高等教育支援・高等教育機関に関すること</b>		
1. 高等教育支援の現状と通訳に求められるもの	4.4	5
2. 遠隔支援システムの体験	3.6	3.7
3. 大学組織について	3.6	4.3
4. 大学における障害学生支援の体制について	3.6	4.4
5. 論文の読み方 (論文リテラシー)	4.4	4.7
6. 事前資料や論文検索の方法	4.4	4.6
7. 高等教育通訳に適したフォロー (サポート) 方法	4.1	4.5
8. 聴覚障害学生との人間関係の作り方	3.8	4.1
9. 聴覚障害学生の状況に応じた通訳方法	4.1	4.7
-1 ネイティブサイナーとノンネイティブサイナーへの通訳方法	4.3	4.6
<b>VI 通訳全般に関すること</b>		
1. 通訳者の役割について	3.8	4.1
2. 日本での音声同時通訳者養成	3.6	3.3
3. 通訳の事前準備の方法	4.1	4.4
4. 音声通訳の理論・通訳理論モデルについて	4.3	3.8
5. 国際会議の音声通訳について	3.3	3
6. 通訳作業の自己評価・チームでの振り返り方法	4.2	4.3
7. 自己研鑽 (セルフトレーニング) の方法	4.2	4.5
<b>VII 日本語に関すること</b>		
1. 言語学 (音韻論・形態論・統語論)	4.2	3.8
2. 日本語理解	4.7	4.7
-1 講義の内容把握・予測	4.8	4.8
-2 要約練習	4.3	4.5

るものや、「ゼミや研究発表の読み取り通訳」「大学講義の聞き取り通訳」「大学講義野内容把握・予測」など高等教育での通訳に特化したテーマであった。

また、個人の事情とは切り離し、これから大学での手話通訳を担おうという通訳者にとって重要かどうかを尋ねた結果、「非常に重要」「重要」との回答が多かったものとして、「大学講義の聞き取り通訳」「ゼミや研究発表の読み取り通訳」「高等教育支援の現状と通訳に求められるもの」「大学講義の内容把握・予測」「論文の読み方」が挙げられた。こうした結果から、高等教育での手話通訳を経験した通訳者の実感として、高等教育というテーマに的を絞った研修が重要であるとの意見が読み取れた。

また、「CL 表現」「ロールシフト」といった日本手話の実技に関する項目も挙げられており、高等教育機関で扱われる学術的論理的な内容を手話通訳する上では、基本となる日本手話の継続的な研鑽が欠かせない要素となることも示唆された。

#### 4. 研修プログラムの概要とモデル研修会の実践例

上述のような検討を経て、高等教育機関において手話通訳を担当するためのモデルとなる研修プログラムを構成した (表 3)。構成にあたっては、これまでの研修実施状況やニーズ調査の結果をもとに、9 つの研修テーマを選定した。これらを「必修」と「選択」に分け、高等教育機関で手話通訳を行う通訳者に学んでおいてほしい内容を「必修」とした。また、通訳者の中には様々な養成プログラムの経験者が混在している現状を考慮し、必要に応じて加えるべき内容を「選択」として提示した。プログラムでは、研修のねらいや指導内容のほか、指導を担当する人材の例や活用できる教材例を提示し、各大学や手話通訳派遣・養成機関等が独自に研修を実施する際に参考となるようにした。

さらに平成 24 年 1 月に、このプログラムをもとに 2 日間のモデル研修会を企画し、実際に大学等で手話通訳を担当している通訳者 28 名の参加のもと研修を実施した (表 4)。

以下、研修プログラム内の主なテーマについて、具体的な指導内容やねらい、モデル研修会での実践事例について詳述する。

##### 4.1 大学の組織・支援体制について【必修・講義】

手話通訳者にとって様々な通訳現場の中でも、大学は特殊な場の一つであり、依頼元の事務担当者や授業を担当する教員、利用者である聴覚障害学生とどのように関わったらよいかかわからないといった声がたびたび聞かれる。こうした戸惑いがもとで授業に関する事前の情報収集や聴覚障害学生との円滑な関係作りに支障をきたすことが

ないよう、アンケート調査結果では必要性や重要度がそれほど高いとは言えなかったが、本項目を設けた。実際には、各大学等の支援組織の担当者やコーディネーターから、学内の支援体制や業務の流れについて説明してもらうことが望ましいと思われる。モデル研修会においては、支援体制構築に詳しい専門家を講師に招き、手話通訳支援を導入している大学の事例や、教員側から見て協同しやすい通訳者像等について講義をいただいた。

#### 4.2 高等教育支援の通訳に求められるもの【必修・講義】

試行的な研修でも評価が高く、アンケートにおいても高い重要度が示されたため、本項目を設けた。大学等での手話通訳の特性としては、生活場面の通訳との違いと、聴覚障害学生のニーズ特性の2点が大きく挙げられる。成人ろう者の生活を支えるための手話通訳と、学術的な講義に触れ主体的に研究活動を行う大学での手話通訳とではどういった違いがあるのかという点について、専門家あるいは当事者の卒業生等から俯瞰的な講義を受けられることが望ましい。また、聴覚障害学生は手話通訳をはじめ情報保障支援を利用した経験が浅く、手話の力にも個人差が大きいことから、通訳に対する自らのニーズをはっきり表明するのが難しいケースも少なくない。彼らは在学中の支援利用経験を通して自らのニーズの把握や表明の方法を学び、また4年間でニーズが変化していくという特性を踏まえ、手話通訳者は柔軟な関わり方をする必要がある。実際の研修方法としては、通訳利用者となる聴覚障害学生から自分の生い立ちや現時点での通訳への要望などを話してもらうことが望ましい。モデル研修会においては、聴覚障害のある大学教員を講師に招き、聴覚障害学生に対応するにあたって留意してほしい事柄について講義を受けたほか、学術的論理的な内容の通訳にあたって技術として求められていることについて概説された。

#### 4.3 大学での聞き取り通訳【必修・実技】

実際に大学等で行われている授業を題材に聞き取り通訳の実技を行う。アンケート調査で本項目の重要性が示されたことに加え、手話通訳者は大学の授業に対して、「内容が難しい」「専門用語の手話表現が困難」「若い学生は日本語対応手話を求めている」という固定化したイメージを抱きがちであるという大きな課題がある。用語だけにこだわらず、論理の展開や授業者の態度（断定の度合）などを忠実に通訳することの重要性に気づき、その技術を高めることをねらいとして本項目を設けた。実際には、聴覚障害学生の在籍する専攻の授業映像や教員による模擬授業を題材に実技を行い、聴覚障害のある大学教員など通訳の評価ができる人材に助言を依頼できることが望ましい。モデル研修会においては、ある授業のうち10分程度の通訳を

事前課題として受講生に課し、研修当日は数名のグループに分かれて観察学習および相互評価を行ったほか、大学や大学院で手話通訳利用経験のある聴覚障害者を講師に招いて原文と通訳とを比較しながら、助言を得た。

#### 4.4 論文や資料の読み方・事前学習方法【選択・講義／実習】

授業の資料を事前に得られた場合こういったポイントに留意して読みこなせばよいか、また授業担当教員と打ち合わせの機会を持てた際にどういった事柄を確認すればよいか、事前情報が乏しい場合にどのように独力で情報収集するかという点は、支援の質を保つために不可欠な要素と言える。学術的な題材に慣れるという目的も含め、関連分野の論文の精読や、提示された資料を読みこなすトレーニングを行うため、本項目を「選択」として設けた。モデル研修会においては、事前準備のポイントや講師との打ち合わせの進め方、インターネットを使った情報収集の方法等をまとめた参考資料「通訳の事前準備」を作成し、テキストとして使用した。また、ある授業の通訳を担当すると仮定して、授業で使用するスライド資料を事前課題として受講生に提供し、資料をもとにどのような準備をしたか、資料の内容をどのくらい理解できたか等について、大学教員複数名を講師に招いてグループワークによって検討した。講師からは、資料の内容一つひとつについて詳細に調べることよりも、資料をもとに授業の全体像や流れを予測することや、提示された用語やグラフにより教員が何を伝えようとしているのかを把握することの重要性が助言された。

#### 4.5 手話言語学【選択・講義／実技】

先述のように、若い聴覚障害学生は日本語対応手話による通訳を求めているというイメージが抱かれがちであるが、実際に大学等で手話通訳を担当した経験者からは日本語の手話の研修ニーズが高く、学術的論理的な内容の通訳に日本語の知識や技術が欠かせないことを物語っている。こうした現状を受け、「選択」として本項目を設けた。実際には、地域の聴覚障害者等から日本語の手話の指導を受けたり、日本語文法のテキストで学んだりして、大学等での通訳に活かしていくことが望ましい。モデル研修会においては、ろう者の日本語指導者を講師に招き、日本語の音韻について講義を受けたほか、CL表現や否定・疑問表現等を中心に実技を交えながら、日本語をいかに日本語に翻訳・表出するかについて学んだ。

### 5. まとめと今後の課題

高等教育機関においては、今後、手話を使用する聴覚障

害学生の進学やディスカッション・実習等の教育形態の増加に伴い、手話通訳による情報保障のニーズも増えてくることが予想される。手話通訳支援の質的保障、ひいては聴覚障害学生の修学環境の向上のためには、近隣地域の手話通訳者リソースにただ頼り、派遣された通訳者個人の努力に一任するのではなく、大学が主体的にこうした研修の場を設け、人的資源を有効に活用していくことが不可欠であると言える。実際、モデル研修会に参加した全国各地の通訳者からは、このような研修を受ける機会がこれまで一度もなかったとの声が圧倒的に多く、2日間の研修プログラムでは十分とはいえず、より掘り下げた講義や助言を得たかったとの感想が多く挙げられていた。通訳の現場に身を置く手話通訳者は、研修の充実をはじめとする支援の質向上のための環境整備を渴望している現状がうかがわれる。

本稿で示した研修プログラムが各地域、各高等教育機関の状況に合わせた形で活用され、大学等が主導して聴覚障害学生支援のための研修が各地で設けられていくことを

期待する。

## 6. 謝辞

研修プログラムを検討するにあたっては、実際に高等教育機関で手話通訳活動を行っている方々で、様々な養成機関出身の手話通訳士の皆さんに手話通訳者チーム及び研修プログラム検討 WG メンバーとしてご協力をいただきました。5年間にわたるご協力に心より感謝の意を表します。各研修会にてご指導、ご助言を賜った講師の皆様にも御礼申し上げます。

## 参考文献

- [1] 独立行政法人日本学生支援機構：平成24年度（2012年度）大学、短期大学及び高等専門学校における障害のある学生の修学支援に関する実態調査結果報告書。2013年。

表3 高等教育機関における手話通訳者の研修プログラム

必修					
1	高等教育支援の現状	講義	高等教育における支援の経緯や現状、高等教育特有の情報保障の特性を知る。	・聴覚障害学生支援の現状について ・全国的な取組について	・聴覚障害学生支援の専門家 ・Tipsheet①②⑥
2.1	大学の組織・支援体制について	講義	通訳者として関わる大学などの高等教育機関の組織や支援体制についての知識を得て、よりスムーズな情報収集や通訳環境の整備に活かす。	【概論】 ・支援のルール、手話通訳導入の事例	・「一步進んだ聴覚障害学生支援」(生活書院)
2.2				【各論】 ・支援担当部署と役割分担・業務の流れ	・大学の支援組織の教職員、障害学生支援コーディネーター等
3	大学での聞き取り通訳① 大学での読み取り通訳①	実技	大学の模擬講義やゼミの場面での模擬通訳を通して、高等教育機関における手話通訳の特徴を知る。	・大学講義やゼミ形式授業における模擬通訳	・教員、聴覚障害のある教員、聴覚障害学生、ゼミを履修している学生等
4.1	高等教育支援の通訳に求められるもの	講義	大学において、在籍する学生の知識の成長や手話等のコミュニケーション能力の成長に合せて手話通訳者が心がけなければならないことを知る。	【概論】 ・地域通訳との違い ・学生のニーズ特性・変化	・聴覚障害当事者かつ支援の専門家 ・聴覚障害者の卒業生
4.2				【各論】 ・在籍する聴覚障害学生のニーズ	・手話通訳を利用している聴覚障害学生

選択	テーマ	形式	ねらい	指導内容	指導者の例・教材例
5.1	論文や資料の読み方・事前学習方法	講義 実習	研究論文の読み方と理解のポイントを知り、専門的な内容的確かな通訳に活かす。 効率的な講師との打ち合わせ方法を学ぶ。	【予習の仕方】 ・事前資料の活用方法 ・講師との打ち合わせ方法	・大学教員・ゼミ生 ・通訳のための予習ポイントをまとめたテキスト
5.2				【文献の読み方】 ・研究論文の読み方(精読及び短時間の予習)	
5.3				【各論】 ・在籍学部に関連文献精読	
6	日本語理解	講義 実習	大学講義での論理展開、話者の特徴に左右されずに重要な話の流れを把握する力を養う。	・文章の構造把握、理解過程における「予測」 ・要約練習 ・講義の談話の表現と理解	・日本語や談話分析の専門家 ・要約練習教材など
7	手話言語学 (日本手話のしくみ)	講義 実技	日本手話の言語的特性や文法の基礎知識を学び、手話通訳への応用方法について知識を得る。	・音韻論・文法論・翻訳論 ・分類詞・手話形態論・非手指動作	・手話言語学の専門家 ・「日本手話のしくみ」(大修館書店)
8	日本手話 (CL・RS等)	実技	日本手話の技術を向上させ、高等教育における通訳での論理性の伝達に役立てる。	・日本手話文法学習 ・日本手話の暗唱 ・絵や映像を基にしたCL表現練習	・日本手話の指導者
9	大学での聞き取り通訳② 大学での読み取り通訳②	実技	高等教育機関における手話通訳の特徴を知った上で、求められる通訳のトレーニングを行う。	・講義、ゼミ等の模擬通訳 ・通訳ペアでの引継方法 ・打ち合わせ、反省会の方法	・教員、聴覚障害教員、聴覚障害学生、ゼミを履修している学生

表4 モデル研修会の内容およびスケジュール

1日目

		テーマ	形式
10:00	15分	集合 オリエンテーション	
10:15～10:40	25分	①高等教育支援の現状	講義
10:40～11:20	40分	②大学の組織・支援体制について	講義
11:20～12:00	40分	③高等教育支援の通訳に求められるもの	講義
12:00～13:00		休憩	
13:00～15:30	150分	④大学での通訳	実技
16:00～18:00	120分	⑤日本手話のしくみ	講義・実技

2日目

		テーマ	形式
10:00～12:00	120分	⑥日本語理解	講義・演習
12:00～13:00		休憩	
13:00～15:00	120分	⑦事前学習方法	演習
15:15～15:45	30分	まとめ・アンケート	

## Study of a Training Program for Sign Language Interpretation in Post Secondary Education

NAKAJIMA Akiko<sup>1)</sup>, HASUIKE Michiko<sup>2)</sup>,  
SHIRASAWA Mayumi<sup>1)</sup>, ISODA Kyoko<sup>1)</sup>, HAGIWARA Ayako<sup>1)</sup>, ISHINO Maiko<sup>1)</sup>

<sup>1)</sup>Research and Support Center on Higher Education for the Hearing and Visually Impaired,  
Tsukuba University of Technology

<sup>2)</sup>Ibaraki Association of Sign Language Interpreters

**Abstract:** In post-secondary educational institutions, support activities for deaf or hard of hearing students and training activities for the supporters are increasing in number. The learning environment for these students is also being improved. However, information support by sign language interpretation for them in each institution has not been devised enough. Therefore, it is necessary to establish a training method such that sign language interpreters can correspond to the academic contents. This paper reports on the process, contents, and features of the training program for sign language interpreters in post-secondary education that we have studied for 5 years. Moreover, it gives suggestions that might lead to future improvements in the quality and greater popularity of information support through sign language.

**Keywords:** Deaf or hard-of-hearing students, Post-secondary education, Sign language interpretation